
蒼草日記

夏川藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼草日記

【Nコード】

N4202BA

【作者名】

夏川藍

【あらすじ】

県内トップ校に通う、草川蒼真には折からの疑問があつた。それは学年主席であり、学生の鏡ともいえる自分が、変人呼ばわりされていることである。そして、同気相求むということか、蒼真の周りには次々と変人が集まっていくのであつた。

異端者を疎む現代社会で、青春を謳歌する変人たち。そんな彼らの少し変わった物語です。

第一話

頭痛がする。

一滴の水が生み出した波紋は、やがて船を揺らすほど成長し、ついに岩壁を打ち砕かんばかりの勢いで、我が頭に押し寄せる。そうして、押し寄せた波はその身を岩壁に打ち付けると満足したように引いていき、少しぐらい休憩すればよいのに、寸暇を惜しんで再び押し寄せる。

しかも、こちらは絶え間ない攻撃に疲弊しきつていくというのに、相手の勢いは衰えるどころか次第に増大している始末だ。

どうやら、驚異の寛容さを備えたこの私にも、我慢の限界があるというのをご存じないらしい。

こうなつたからには、虚々実々、あらゆる手段を用いて応戦してやろうというものだが、如何せん今はタイミングが悪い。先刻から、しばらく鳴りを潜めていた睡魔どもが手を繋いで仲良くタップダンスを踊り始めたのだ。しかも、満足しきれなかったのか、大声で賛美歌を歌い始める気配すらある。

そう、要するに徹夜明けなのだ。

しかも一日ではない。二日だ。まったく仮眠もしていない。正真正銘の徹夜だ。ここまで追い詰められてしまうと、さすがの私も降参せざるをえない。前後は頭痛という名の大波が、左右には大勢の睡魔どもが、私の隙を虎視眈々と狙っているのだ。これ以上、千思万考しようが窮余の一策すら見つからないであろう。

ええい、もうやけくそだ！

私は胸中で叫んだ。白旗だ。もう白旗を上げてしまおう。教科書

を立て、その裏で顔を伏せ、睡眠をとる。たったそれだけでこの苦痛から解放されるのだ。それを実行しない馬鹿がこの世界のどこにいるのだ。

考えがまとまったからには、いつまでも思考する意味もない。実行に移すまでだ。現国の教科書をそつと立てる。さらに倒れぬよう、筆箱を駆使して支えを作る。もちろん周囲に目を配りながら。今の私は、さぞかし挙動不審に見えるだろう。しかし、これも致し方ないことなのだ。我が身を守るためなのだから。

筆箱で支えを作り終え、徹夜明けとは思えない軽快な動きで周りを見渡す。大丈夫だ。皆一様に授業に集中している。私の不可解な行動に気付く者など誰一人としていない。この計画においての一番の大敵、笹倉教諭も、長文を黒板に羅列していて、私に気付く気配などない。千載一遇のチャンスとはこのことを言うのである。

私は意気揚々と机の上に腕を組み、顔を埋め、困憊しきった瞼を閉じた。

刹那。

爽快な音と共に、得体の知れない固形物が、私の髪を揺らし、パリン、とこれまた爽快な音を響かせた。

全身の血液が逆流した。否、静脈で謙虚に働く弁がいる限り、血液の逆流なんぞありえないのが・・・しかし、確かにそれを感じたのだ。気のせいではない、確固たる自信がある。虫の知らせと言っべきか、嫌な気配が全身を凌駕する。

とりあえず、現実を確認せねばなるまい。私はごく微小な勇気を総動員し、忍びやかに背後へと視線をずらした。かくして、私の視界に飛び込んできたものは、新雪のごとく白々と輝きを放つ・・・そう、チヨークだったのだ。

「どついつつもりかしら、草川君」

指一本も差させない冷徹な声が反響して、余韻という名の恐怖を残す。その直後、血液の逆流速度が跳ね上がった。物凄い速度で、血液が駆け巡って行く。今頃、毛細血管は破裂し、静脈の弁は千切れているであろう。これが杞憂だったらどんなに良いことか。

「何のことでしょうか、先生」

あえて無然として答える。私にだって矜持ぐらいはあるのだ。

「あなた、寝ようとしたわね。あたしの授業で」

核心をついた問いである。

「はは、まさか。清廉潔白、品行方正を絵に描いたようなこの私が、居眠りなんて・・・」

「黙りなさい、気絶したいの？」

そう言い放つ美貌の現国教師の手中には、先端がやけに尖ったチヨークが収まっている。憶測にすぎないが、毎日黒板で削り続け、ここまで尖らせたのであろう。

教師がそんな事をして良いのか！と喚き散らしたいところだが、あいにく生殺与奪の権を握るのは彼女だ。ここは、あれだ。冗談で誤魔化すのが一番の戦法だ。

「先生、森羅万象、全てのものに魂は宿ると言いますので、チヨークを粉々にするのは、いささか残虐かと・・・」

「じゃあ、あなたを粉々にするわ」

「どうぞやら趣旨が通じていないらしい。」

「ははは。これはまたご冗談を」

「本気よ」

「まさか」

「微粒子になりたいようね」

世の中には、佳人薄命といった言葉があるようだが、どうもこの教師には当てはまらない気がしてならない。

「先生、私は至極真面目に授業を受けていました」

作戦変更だ。白を切るとしよう。

「本当に？」

先生が怪訝な目を向ける。

「月に誓って」

「不誠実ね」

「それなら、神に誓って」

いささか虚栄を張り過ぎかと思うが、気にせず言葉を紡ぐ。しかし、それを受けた先生は、待ってましたと言わんばかりの表情だ。

僅かながらも、我が胸中に不安が過る。

「じゃあ」

先生は会心の笑みを浮かべた。

「なんで、教科書が逆さまなの？」

会心の笑みは、満面の笑みに変わっていた。

茫然自失と言えば良いか、意気阻喪と言えば良いか。的確な表現を探しあぐねていた私に、三限目終了のチャイムは、時の流れを明朗に告げた。トントン、と手際よく教材をまとめ、愛用の眼鏡をはずした先生は一言、

「草川君は今日の放課後、第二資料室を掃除するように」

碌でもない土産を残して立ち去った。そしてそれを追うように教室を支配したのは、やはりと言うべきか、抱腹絶倒したクラスメイ卜達の笑い声であった。

頭痛は悪化しそうだ。

私こと草川蒼真は、県立東高校に通う普通の高校一年生である。

この自己紹介をすると、大抵の人間は、態とらしく羨み、露骨に僻むのだが、これが自己紹介の時に用いる常套句であるのだから致

し方あるまい。

だいたい、県内トップと呼ばれるこの学校を自ら志したのではない。もともと私は二番手校あたりで、晴耕雨読の日々を送ることを熱望していたのだが、某教師の猛烈な反対により、私の希望はあえなく却下。そしてなにを血迷ったのか、気付けば県内一の難関で有名な東高を受験していたという訳だ。しかもその間の受験勉強は過酷を極め、朝の5時から夜中の2時まで、勉強に心血を注ぐことを強要されたのだ。僻むくらいなら、私の置かれた境遇を慮って、同情してほしいくらいだ。

とはいえ、結局その受験勉強が功を奏したのか、現在この学校に籍をおいているのは事実なので、一応例の教師にも感謝はしている。ここでの高校生活はまさに、平穩無事、といったところであろうか。主だった事件もなく平和そのものだ。また、新たな知識を求めれば、それに深く、そして広大な知識を有する教師陣が、我々の好奇心を満たしてくれる。常に我々の好奇心は刺激され、知識に関して貪欲でいられるのだ。

実に非の打ち所のない、恵まれた環境である。

- ・ ただ一つ、温和篤厚、謹厳実直で学生の鏡とも言えるこの私が・
- ・ 変人扱いされている点を除けば、だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4202ba/>

蒼草日記

2012年1月11日02時09分発行